

全羅道式アクセントについて

李 文 淑

1. はじめに

韓国語の諸方言には日本語と同様に語アクセントが存在することが知られている。特に朝鮮半島の東部（慶尚道、江原道の一部）でははっきりしたアクセントの対立があり、その規則性や特徴については広く研究されてきた。しかし、朝鮮半島の西南部地域でもアクセントの対立を持つ方言があり、その性質が慶尚道のそれとは大きく異なることはあまり知られていない。本稿では、朝鮮半島の西南部地域の全羅道方言にもアクセントの弁別性が認められ、これらの方言は慶尚道方言のアクセント解釈の方法では本質が把握できないことを指摘する。また、全羅道方言のアクセントはそれぞれのアクセント体系と所属語彙は異なるが、基本的な性質は同じであることから、全羅道式アクセントと総称する。

以下では、全羅道式アクセントを特徴付ける要素を四つにまとめて、それぞれの例を提示する。さらに、既存の解釈より単純化した解釈法を提案する。本文中の例は全羅道式アクセントの一例として光州方言と全州方言を提示するが、提示されていない他の方言も広い意味で同じ特徴を持つ。

2. 全羅道式アクセントの分布

朝鮮半島の西南部地域の方言—行政区域上は全羅南道と全羅北道—はアクセント上同様の特徴を持つ。しかし、行政区域上は全羅道に属しても慶尚道と接している地域は慶尚道式のアクセント特徴を持っている。慶尚道式アクセントを持つ全羅道方言は本稿の考察対象ではないので扱わないが、以下の図1に表示しておく。図1では全羅道地域のアクセント分布を3グループに分けて示す。×と表示されている地域は慶尚道式アクセントを持つ¹。斜線で表示している地域は全羅道式アクセントを持っており、全羅道全域で広く観察される。また、・で表示している地域は全羅道式アクセントがさらに変化し、アクセントの弁別性を失っている地域である。

¹ これらの地域はさらに小さい邑や面で分けられるが、平地は全羅道式アクセント特徴を持っており、山間部は慶尚道式アクセントを持つ。筆者の調査では、南原方言の場合市内は全羅道式アクセントを持っているが、山間地域である雲峰邑山内面では慶尚道式アクセントを持つ。行政区域とアクセント分布が一致しないいい例である。



図 1. 全羅道式アクセントの分布

図 1 を見ると、北部に行くほどまた西部に行くほどアクセントの弁別性が失われていくことがわかる。筆者の調査によると、全羅北道の西部地域である郡山市、金堤市、井邑郡、高敞郡、扶案郡、全羅南道新安郡はアクセントの弁別性が失われている。

表 1. 全羅道式アクセントの分類

弁別性の有無	アクセントの種類	地域
弁別的	三型アクセント	光州、木浦、麗水、順天、宝城、羅州、和順、谷城、求禮、潭陽
	二型アクセント	全州、南原市内、鎮安、茂朱市内
非弁別的	一型アクセント	郡山、金堤、井邑、高敞、扶案、新安

3. 従来の研究

全羅道方言のアクセントについて詳しく述べている研究は多くない。金次均（1969）が初めての資料であるが、光州方言を含む全羅南道方言は以下の音調型を見せているとしている。

表 2. 全羅南道方言の音調型（金次均;1969）

1 音節語	●		○	
2 音節語	●○	●●	○○	○○
3 音節語	●○○	●●○	○○○	

●○○はほとんど変化が見られないが、濃音、激音、s、h で始まる語は●●又は○○に、それ以外で始まる語は○●○に統一していくと述べている。

筆者の解釈でまとめると、●●と○○は弁別的ではない。また、残っている●●と○●は頭子音の条件で決まるとしているが、結局、弁別性を持つ音調型は○●とそれ以外である。

また、金次均（1969）のデータをもとに早田輝洋（1999）では、光州方言が下降の●○(○)

と非下降の○●(○)、●●(○)を持つ声調言語であると解釈している。

林成圭(1988)では、全羅北道の益山、金堤、扶安方言を対象に音調の特徴をまとめているが、高低の音域が狭く、頭子音によって音調の予測が可能で、音調型は音節数によって決定されるとしている。

李基文(1991: 53-54)では、全羅道全域はアクセントの対立を持たないとしており、最初の母音を高くする傾向があって、後ろに行くほど低くなるという。さらに、語頭の長母音が高く発音されることから、この地域の方言は低く始まって高くなる音調型は存在しないとしている。

裴株彩(1991、1994)では、全羅南道高興方言を扱っており、音節数別に三つの音調型が現れるが、これらは母音の長短と頭子音の種類ですべて予測可能なものと捉えている。

Jun, Sun-Ah(1996)では、全羅南道方言はLHLとHHLの二つの音調型で現れるが、これらは頭子音によるもので、アクセントは弁別的でないとしている。

金次均(2001)では、全羅南道潭陽方言の音調について述べているが、弱いながらもアクセントの対立を認めている。

これらの研究はアクセントの対立を認めない立場で、さらに裴株彩(1991、1994)以外は断片的に言及しているだけで、詳細を示していない。

金次均(1969)以降の研究では、全羅道方言はアクセントの対立を持たないとされてきたが、田村宏(1985)、福井玲(1998)、李文淑(2003、2005)孫在賢(2005)で新たな調査と分析で全羅道方言にはアクセントの対立を持つ方言があり、なお慶尚道方言とは異なる性質を持っていることが指摘されるようになった。

4. 全羅道式アクセント

4.1 全羅道式アクセントの特徴

全羅道式アクセントは共通して以下の特徴を持っている。

- a) 頭子音の種類
- b) 語頭の長母音の有無
- c) 第1音節と第2音節の音調
- d) 3音節目以降の音調は任意

これらの要素は全羅道式アクセントと他の方言のアクセントが区別される大きい特徴である。特にc)とd)の特徴はこれまで指摘されなかったもので、全羅道方言アクセントの解釈に重要な要素となる。各特徴については以下で詳しく考察する。

4.1.1 頭子音の種類

全羅道式アクセントは頭子音の影響を強く受ける。頭子音が平音であれば、各方言で現れ得るすべての音調型で現れるが、それ以外の子音が語頭にあると、高く始まる音調型だけが現れる。以下に光州方言の例を示す²。

² 光州方言のアクセント体系は以下の通りである。(●は高い音、○は低い音、□は任意の音、()

表3. 頭子音の種類と音調型① (光州方言)

音節数	頭子音の種類	語例	音調型	グループ
1 音節語	平音	nat (昼)	●(○)	A
		tak (鶏)	○(●)	C
	濃音、激音、s、h	² tal (娘)	●(○)	A
		sam (人生)	●(○)	A
		² kot (花)	●(●)	B
		ʃ ^h εk (本)	●(●)	B
2 音節語	平音	ʃa.tu (すもも)	●○	A
		nu.na (姉)	●●	B
		ka.ru (粉)	○●	C
	濃音、激音、s、h	² pa.lɾɛ (洗濯)	●○	A
		ho.su (湖)	●○	A
		ʃ ^h i.n.ku (友達)	●●	B
3 音節語	平音	ʃoŋ.a.ri (ふくらはぎ)	●○○	A
		jo.tu.ruum (ニキビ)	●●○	B
		ko.jaŋ.i (猫)	○●○	C
		sa.t ^h u.ri (方言)	●○○	A
	濃音、激音、s、h	k ^h o. ² ki.ri (象)	●○○	A
		hal.mɔ.ni (御婆さん)	●●○	B
		p ^h uŋ.teŋ.i (コガネムシ)	●●○	B

光州方言の場合、第1音節だけが低い音調型、第1音節から高く始まり次の音節までその高さが続く音調型、第2音節から高くなる音調型の三つの音調型で現れるが、頭子音が平音の場合、1音節語を除いてこれらの3種類の音調型が全部現れる。半面、頭子音が濃音・激音・s・hであれば、高く始まる音調型でしか現れない。つまり、第1音節だけが低い音調型と第1音節から高くなり次の音節まで高い音が続く音調型の2種類だけが現れ、第1音節は低く、第2音節目から高くなる音調型は見られない。

次に提示する表4は、光州方言と同様に全羅道式アクセントを持つ全州方言の例である。全州方言は光州方言より単純化したアクセント体系³を持っているが、音節数が長くなると弁別性を失ってしまう。以下の表4で示している通り、第1音節だけが低い音調型が現れるのは2音節語のみで、1音節語及び3音節語以上では観察されない。さらに、2音節語でも頭子音が

は助詞を表す)

	1 音節語	2 音節語	3 音節語	4 音節語
A	●(○)	●○(□)	●○□(□)	●○□□(□)
B	●(●)	●●(□)	●●□(□)	●●□□(□)
C	○(●)	○●(□)	○●□(□)	○●□□(□)

グループAは第1音節だけが低いパターン、グループBは高く始まって第2音節まで同じ高さが続くパターン、グループCは第2音節から高くなるパターンである。

³ 全州方言のアクセント体系は以下の通りである。

	1 音節語	2 音節語	3 音節語	4 音節語
A		●○(□)		
B	●(●)	●●(□)	●●□(□)	●●□□(□)
C	○(●)	○●(□)	○●□(□)	○●□□(□)

体系を見ると2音節語だけが3つの音調型で現れる。1音節語では頭子音の条件でグループBに属するかグループCに属するかが決まり、グループAは観察されなかった。3音節語からはグループAとグループCの弁別性が失われる。結局、2音節語以外ではBとCの対立があるだけである。

平音の場合のみで、頭子音が濃音、激音、s、h、の場合は第1音節から高くなり次の音節まで高く続く音調型のみが現れる。つまり、2音節語以外は頭子音の種類によって語アクセントが決まる傾向が強くなり、頭子音が平音であれば、グループBかグループCで現れ、頭子音が平音以外であれば、グループBだけが現れる。

表4. 頭子音の種類と音調型② (全州方言)

音節数	頭子音の種類	語例	音調型	グループ
1音節語	平音	mok (首)	○(●)	C
		pit (光)	○(●)	C
	濃音、激音、s、h	² fak (ペアー)	●(●)	B
		him (力)	●(●)	B
2音節語	平音	mɔ.ri (頭)	●○	A
		pa.ta (海)	●●	B
		ko.ki (肉)	○●	C
	濃音、激音、s、h	² ko.ma (子供)	●●	B
		ʃhi.ma (スカート)	●●	B
		ku.rim.ʃa (影)	●●○	B
3音節語	平音	pa.tuk.i (子犬)	○●○	C
		so.na.ki (夕立)	●●○	B
	濃音、激音、s、h	² ka.ma.kwi (カラス)	●●○	B

4.1.2. 語頭の長母音の有無

全羅道方言の多くは語頭の長母音を保っていることが多いが⁴、この場合、語のアクセントが決まる際、最優先される。以下に例を示す。

表5. 語頭の長母音と音調型

音節数	語例	音調型	
		光州方言	全州方言
1音節	to:n (金)	● : (○)	● : (●)
	po:l (ほお)	● : (○)	● : (●)
2音節	ku.rim (絵)	● : ○(○)	● : ●(○)
	na.mu (木)	● : ○(○)	● : ●(○)
	sa:ram (人)	● : ○(○)	● : ●(○)
	p ^h a:ri (ハエ)	● : ○(○)	● : ●(○)
	t ² a:l.ki (イチゴ)	● : ○(○)	● : ●(○)
	ta:l.p ^h ɛŋ.i (カタツムリ)	● : ○○(○)	● : ●○(○)
3音節	ku.rim.ʃa (影)	● : ○○(○)	● : ●○(○)
	ho:ɛŋ.i (虎)	● : ○○(○)	● : ●○(○)
	sa.ma.ki (カマキリ)	● : ○○(○)	● : ●○(○)

以上の表5で見ると、光州方言で語頭に長母音を有する語はすべて第1音節だけが低い音調型で現れており、例外は認められない。また、頭子音の条件が平音とそれ以外の子音で異なっても語頭に長母音を有する語の音調型は頭子音の影響を受けない。

また、全州方言も例外なく第1音節から第2音節まで高い音が続く音調型で現れる。ここでも頭子音の種類は音調型に関与しない。結局、全羅道式アクセントでは、語頭に長母音を持つ

⁴ 全羅道方言の長母音は、歴史的な根拠を持って他の方言とも対応している長母音と、この方言だけに現れる長母音がある。nu:n (雪)、to:n (お金)、pjo:l (星)、si:l (糸)、sa:ram (人)、p^ha:ri (ハエ)、ke:mi (あり)、twe:ci (豚)、wɔ:n:suŋ.i (サル)、ko:ku.ma (さつまいも)などは前者で、ku.rim (絵)、na.mu (木)、na:pi (蝶々)、toŋ:san (丘)、ku.rim.ʃa (影)、kwaŋ:ʃu:ri (籠)などは後者の例である。

と低く始まる音調型では現れないと言える。

しかし、これらの方言に見られる長母音は、複合語になったり、長い助詞や語尾が付いたりして語が長くなると短母音化するが、その場合はアクセントも変わる。以下に例を示す。表6は光州方言、表7は全州方言の例である。

表6. 長母音の短母音化①（光州方言）

語例	長母音を含む場合の音調型	短母音化による音調型
ku:l. ² tuk+ŋ ^h ɔŋ.so.pu (煙突) (掃除人)	●:○ + ●●○	●●○○○
mi:l.ka.ru+pan.cɸuk (小麦粉) (練り)	●:○○ + ○●	●●○○○
su.jɔŋ+kjɔŋ.ki.ɸaŋ (水泳) (競技場)	●:○ + ○●○	●●○○○

表7. 長母音の短母音化②（全州方言）

語例	長母音を含む場合の音調型	短母音化による音調型
ko:ŋ.wɔn+kwan.ri.in (公園) (管理人)	●:● + ○●○	○●○○○
ko:ku.ma + ɸaŋ.sa (サツマイモ) (商売人)	●:●○ + ○●	○●○○○

表6と表7は長母音を含む語が前部要素となる複合語の例である。複合語になって語全体が5音節以上になると長母音が実現しないことが多いが、このような短母音化に伴うアクセント交替が見られる。光州方言では●:○…が●●…に、全州方言では●:●…が○●…の音調⁵型になる。

4.1.3 第1音節と第2音節の音調

全羅道方言は第1音節と第2音節の音調によって語のアクセントが決定される。言い換えると、3音節目からは音調が決まっておらず、高く現れても低く現れても語アクセントには影響しない。単独形はもちろん助詞付きの形、複合語、語より長い句でも第1音節と第2音節の音調は一定しており、条件や環境の影響を受けない。本節では、複合語アクセントを用いて第1音節と第2音節の音調だけで語アクセントが決まることを確認する。表8は光州方言の複合語アクセント規則で、Xは前部要素のアクセント、Yは後部要素のアクセント、Zは複合語のアクセント、aは任意のアクセントを表す。

表8. 光州方言の複合語アクセント規則

	X	Y	Z
a	A	a	A
b	B		B
c	C		C

⁵ ただし、語頭の子音が濃音、激音、s、hの場合は短母音化しても●●…と現れ、音調型は変わらない。

表8に示している通り、ZはXだけで決まる。つまり、Yにどんな要素が置かれてもZのアクセントには影響しない⁶。つまり、複合語になって語が長くなってもXの第1音節と第2音節によって複合語アクセントが決まる。以下、表9に例を示す。

表9. 光州方言の複合語の語例

音節数(構造)	語 例	X	Y	Z
2 (1+1)	mil-pat (小麦畑)	A	C	A
2 (1+1)	pap-thon (炊飯器)	C	B	C
3 (1+2)	² tok-paŋ.a (もち米を粉にすること)	B	C	B
4 (1+3)	twi-ŋu.mə.ni (後ろにあるポケット)	A	C	A
4 (1+3)	mul-ŋu.ŋon.ca (やかん)	C	C	C
3 (2+1)	kim.ŋ ^{hi} i-ŋon (キムチチジミ)	C	A	C
3 (2+1)	i.sul-pi (霧雨)	B	C	B
4 (2+2)	ka.ul-so.p ^h un (秋の遠足)	C	A	C
4 (2+2)	sin.mun-ki.ŋa (新聞記者)	B	C	B
4 (3+1)	kɔ.puk.i-al (亀の卵)	A	A	A
5 (2+3)	sɔ:n.mul-po. ² tari (プレゼント)	A	C	A
5 (2+3)	ɔlum-ŋu.mə.ni (氷袋)	B	C	B
5 (3+2)	pi.mu.ŋaŋ-ŋi.te (非武装地帯)	B	C	B
5 (3+2)	pak.mul.kwan-ku.kjon (博物館見学)	C	B	C

次に全州方言の例を示すが、基本的には光州方言と同じで、ZはXのアクセントで決まる。YがZになることはない。

表10. 全州方言の複合語アクセント規則

	X	Y	Z
a	A	a	A(C)
b	B		B
c	C		C

ただし、前述のとおり規則aは3音節語からグループAとグループCの弁別性が失われるため、A+C→A(C)となった場合、複合語のアクセントがXであるグループAによるものかYであるグループCによるものかの判断は不可能である。規則b、cや第1音節と第2音節の高さによってアクセントが決まる特徴からXによるものであると推測するだけである。表11に例を示す。

⁶ 4音節以上の語では一つのアクセント単位にまとまらないものもある。この場合はXとYがそれぞれのアクセントを持って現れるが、XとYの間にはポーズが入る。

音節数	語 例	X	Y	Z
4 (1+3)	khon-ʔkɔp.te.ki (豆の皮)	B	B	B+B
4 (2+2)	ko.ki-ka.ke (精肉店)	C	A	C+A
5 (2+3)	sa.ɔp-po.ko.sɔ (事業報告書)	B	A	B+A
5 (2+3)	ko.ŋhu-ŋam.ŋa.ri (赤とんぼ)	C	A	C+A
5 (3+2)	kjon.san.to-paŋ.on (慶尚道方言)	B	A	B+A
5 (3+2)	mu.kun.hwa-ton.san (ムクゲ畑)	C	C	C+C
6 (3+3)	kwan.pok.ŋɔl-ki.njom.sik (解放記念式)	A	C	A+C
6 (3+3)	ton.te.mun-un.ton.ŋaŋ (東大門運動場)	C	C	C+C

表11. 全州方言の複合語の語例

音節数(構造)	語 例	X	Y	Z
4 (2+2)	kal.pi-ŋɔŋ.sil (カルピ定食)	A	B	A
4 (2+2)	kam.ŋa-ʔkɔp.cil (ジャガイモの皮)	B	A	B
4 (2+2)	mɔ.ri-su.kən (パンダナ)	A	A	A
4 (2+2)	re.mon-sa.tʰaŋ (レモン味の飴)	C	A	C
4 (3+1)	na.tuul.i-ot (外出服)	C	?	C
5 (2+3)	pok.tɔk.paŋ-ŋu.in (不動産の主人)	B	B	B
5 (2+3)	son.pʰuŋ.ki-pa.ɾam (扇風機の風)	B	B	B
5 (3+2)	kuul.ŋit.ki-tɛ.hwe (作文大会)	C	B	C
5 (3+2)	sɛ.ʔki-son.kar.ak (小指)	A	B	A
5 (3+2)	ko.ŋʰu-ŋam.ŋa.ri (赤とんぼ)	A	C	A

光州方言と全州方言の複合語アクセントを見ても3音節目以降の音調は語アクセントに影響しないことが確認できる。

4.1.4 3音節目以降の音調は任意

筆者を含むこれまでの全羅道方言の研究では、語全体に一つの音調がかぶさるような解釈で、語声調⁷又はN型アクセント⁸という概念で解釈された⁹。特に、孫在賢(2007)、福井玲(1998)では全羅道方言をN型アクセントとして捉えている。筆者も李文淑(2008)で光州方言は三型アクセントであるとの見方であった。しかし、全羅道方言全体を見ると、ある一定の部分—第1音節と第2音節—だけの音調が決まっており、それ以外の部分は環境によって変わる現象が多くの方言に見られた。この現象から全羅道方言の多くは言い切り形と接続形¹⁰の区別があるとも解釈された¹¹。まずは言い切り形と接続形を区別する立場の例を示す。

表11. 言い切り形と接続形の区別

語例	単独形	言い切り形	接続形
ha.ru (一日)	●●	●●(○)	●●(●)
na.i (歳)	○●	○●(○)	○●(●)
kʰo.ʔki.ri (象)	●●○	●●○(○)	●●●(●)~ ●●○(●)
to.ʔkɛ.pi (鬼)	○●○	○●○(○)~ ○●○(●)	○●●(●)~ ○●○(●)

表11は全州方言の例で、言い切りの場合は末尾に向かって下降する音調が一般的で、接続形

⁷ 早田輝洋(1999)によると、語声調とは語を単位にしてどんな音調になるかが問題になる体系で、鹿児島方言や京都方言がそれに当たるとしている。

⁸ 上野善道(1984)によると、N型アクセントとはアクセント単位の長さとは無関係に、また品詞も問わず、一定数の対立しか持たないタイプで、九州西部の二型アクセント、隠岐島の三型アクセントが代表的としている。

⁹ 李文淑(2005、2008、2010)、金次均(1969)、孫在賢(2007)、田村宏(1985)、福井玲(1998)などがある。

¹⁰ 言い切り形と接続形は上野善道(1977)による。言い切り形はそこで言い切る場合で、接続形は後に続くつもりで発音する場合である。弘前方言、岩手県雫石方言がこれに該当する。

¹¹ 李文淑(2005)では全州方言が言い切り形と接続形の区別があるとしており、李文淑(2008)では光州方言も言い切り形と接続形の区別を認めている。孫在賢(2007)では、全羅道方言では潭陽方言、益山方言、淳昌方言とソウル方言が言い切り形と接続形の区別を持つとしている。

の場合は末尾に向かって上昇する音調が一般的と言える。しかし、語が長くなると両方とも下降と上昇が繰り返され、複数の高い音調が現れることが観察された。表11に示した例 to.²kɛ.pi (鬼) は、末尾に向かって下降する一般的な言い切り形の音調型○●○(○)以外にも最後に上昇する○●○(●)が見られた。また、末尾に向かって上昇していく接続形の一般的な形○●●(●)と同時に○●○(●)が現れた。同じ環境で数回発音したが、複数の音調型が現れることは音調が決まっていないと判断せざるを得ない。このように3音節目からは音調の不安定が見られる。筆者は以上のような現象を言い切り形と接続形の区別とするより、第1音節と第2音節だけで語のアクセントが区別され、3音節目からの音調は決まっていないとの解釈をする。元々音調が決まっていないので、条件や環境によって予想外の音調が現れても全く問題外である。こう見ることで漠然と無アクセントとして扱われた全羅道方言の多くがアクセントの対立を持つ方言として、また対立は失われたが、頭子音によって又は語頭の長母音によって音調型が予測可能な方言となる。

5. 全羅道式アクセントとソウル方言の音調

ソウル方言の音調に関しては強弱アクセントであるか高低アクセントであるかの議論が絶えなかったが、未だその問題に結論は出ていない。Jun (1996) では、ソウル方言と全羅道方言を対象にした韓国語における異なったプロソディーモデルを提案しているが、この研究がこれまでの音調研究の流れを変えたのは事実である。この論文で韓国語のプロソディーは、アクセント句とイントネーション句から成り、アクセント句は一定の音調パターンを持つとしている。その音調はLHLHを基本とし、1音節語は上昇調、2音節語はLH、3音節語はLLHとLMHで実現する。また、4音節以上になると最初の2音節がLHで現れ、最後の2音節がまたLHで現れる。ここで重要な点は、最初の音節がLで現れることと最後の音節がHで現れることで、その間はLで現れることが一般的としている。ソウル方言の音調に関する基本的な立場は筆者と同じで、ソウル方言も高低による何らかの音調パターンを持つと考える。以下、表12にソウル方言の音調型と語例を示す。

表12. ソウル方言の音調型と語例

1音節語	2音節語	3音節語	4音節語
●(●)	●●	●●□	●●□□
ʔ ^h ɛk (本)	ʔ ² i.kɛ (鍋料理)	sɔ.l.kɔ.ʔi (洗い物)	hal.a.pɔ.ʔi (おじいさん)
○(●)	○●	○●□	○●□□
ʔip (家)	ʔi.ke (しょいこ)	kɛ.ku.ri (蛙)	ton.ku.ra.mi (丸)

ソウル方言においては最初から高くなって2音節目まで高い音が続く音調型と第2音節から高くなる音調型の二つが現れる。これら音調型の分布は頭子音の条件によって決まるが、語頭に濃音、激音、s、hがあれば、その音節と次の音節は必ず高く現れ、それ以外の子音が置かれると第1音節は低く、第2音節は必ず高くなる。ここまで見てわかるが、全羅道式アクセントの特徴四点がソウル方言の音調にもすべて当てはまる。まず、頭子音の種類によって音調が決まる。これはすでに述べた通りである。また、語頭の長母音の有無によって音調が決まる点は、現在のソウル方言が母音の長短を持たないため論外である。ただし、筆者の調査で1920年代と30年代生まれの話者はとてもきれいに語頭の長母音を発音していた。その場合、音調型は

●:○、●:○○～●:●○で現れていたが、長くなると実現しなかった (kim.pap (海苔巻き)、kim.pap.ʃip (海苔巻きのお店)、kim.pap.mali (海苔巻き用の道具)、kim.pap.to.si.rak (海苔巻き弁当))¹²。

次に、第1音節と第2音節だけで語の音調が決まることと3音節目からの音調は任意で決まっていないことは以下の例で確認できる。

- 1) ʃip-e kɛ.ku.ri-ka tuul.ɔ.wat.ɔ 家に蛙が入ってきた

○● ○●●● ○●○○～○●○○

- 2) kɛ.ku.ri-ka hal.a.pɔ.ʃi-han.tʰe kat.ɔ 蛙がおじいさんのところに行った

○●●● ●●○○○● ○●
 ～○●○○ ●●●●●●●●

これらの例を見て分かるように、句を形成して全体が長くなっても第1音節と第2音節は一定の音調を保っているが、3音節目以降は定まっていない¹³。高く現れることもあり、低く現れることもある。つまりこれらの音調は決まっておらず、かつ語全体の音調には関与しない。

6. おわりに

これまで全羅道式アクセントの特徴について述べたが、この特徴は全羅道方言だけでなく、全羅道と北に接している忠清道方言、さらに北にあるソウル方言までも含まれるものである。多くの全羅道方言の音調を考察してみると、3音節目以降に音調交替やゆれが見られる。従来の研究では、このような点から何の決まりもないように捉えられ全羅道方言は無アクセント方言と認識された。また、言い切りや接続の区別があるとの見方もあった。しかし、第1音節と第2音節だけに決まった音調が付与される解釈で、3音節目以降に見られる音調交替の問題は解決できる。

全羅道式アクセントを持つ方言は個人差と世代差が大きく、調査が容易ではない。また、行政区画上同じ市町村でも地形によって往来が少ない地域などはまた異なるアクセントを持っていることもあるため、より細かく地域を分けて調査を行う必要がある。

今後は、全羅道式アクセントと慶尚道式アクセントがどのように関係し、変化していくかをさらに追及していかないとはいえない。

¹² 第1音節の長音は軽い上昇調で現れる。

¹³ ソウル方言の音調について孫在賢(2007)では、言い切りと接続の区別があり、言い切りは必ず低く終わり、接続は高いまま続く特徴で両者が区別されるとしている。また、語頭の音調は頭子音の種類によって決まるとしながらも、語頭に平音があると語頭の音調が決まらないという。さらに、接続形に見られる末尾卓立型はイントネーションとして扱い、接続形と区別している。筆者はこの見解には疑問を感じる。接続形とイントネーションは何を根拠に分けているかが明確ではない。言い切り形の特徴と言っている末尾が必ず低くなることは、発話の終わりを示すイントネーションであり、接続形の末尾音節が高くなることは後に何かが続くことを表すイントネーションとして捉え、両者は対応するものと見る方が妥当と思われる。

参考文献

- 李基文 (1991) 「한국방언의 기초적 연구」 (『韓国方言の基礎的研究』)
『大韓民国学術院論文集人文社会科学編』 30 ; 45~143
- 李文淑 (2003) 「韓国語全州方言のアクセント」『東京大学言語学論集』 22、東京大学人文社会系研究科言語学研究室157~173
- 李文淑 (2005) 「全羅南道光州方言の音調について」『東京大学言語学論集』 24、東京大学人文社会系研究科言語学研究室 ; 115~139
- 李文淑 (2008) 「全羅道方言から見た韓国語のアクセント変化について」東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野博士論文
- 李文淑 (2010) 「全羅道方言アクセント再考察」『東京大学言語学論集』 29、東京大学人文社会系研究科言語学研究室 ; 139~153
- 李文淑 (2012) 「韓国語方言における語彙アクセント消失とソウル方言音調パターンの成立—ソウル・全州・光州方言の比較から」日本言語学会第144回大会予稿集 ; 104~109
- 上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」『岩波講座日本語 5 音韻』 岩波書店 ; 281~321
- 上野善道 (1984) 「N 型アクセントの一般性について」『現代方言学の研究』 2、明治書院 ; 167-209
- 金次均 (1969) 「전남방언의 성조」 (『全南方言の声調』) 『ハングル』 144 ; 141~171
- 金次均 (2001) 「담양 방언의 운율」 (『潭陽方言の韻律』) 『ハングル』 251 ; 39~90
- 孫在賢 (2007) 「韓国語諸方言アクセントの記述的研究」東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野博士論文
- 田村宏 (1985) 「韓国語全羅南道麗水市方言のアクセントについて」『九大言語学研究室報告』 6、九州大学文学部言語学研究室 ; 47~55
- 早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』、大修館書店
- 福井玲 (1998) 「전남 광양시 방언의 액센트 체계와 그 지리적 분포에 대하여」 (『全南光陽市方言のアクセント体系とその地理的分布について』)、『国語学』 31 ; 271~293
- 福井玲 (2001) 「韓国語のアクセント」『音声研究』 第5巻第1号、音声学会 ; 11~17
- 裴株彩 (1991) 「고흥방언의 음장과 음조」 (『高興方言の音長と音調』) 『국어학』 21 ; 275~306
- 裴株彩 (1994) 「고흥방언의 음운론적 연구」 (『高興方言の音韻論的研究』) ソウル大学博士論文
- Jun, Sun-Ah (1996) *The Phonetics and Phonology of Korean Prosody*
New York & London, Garland Publishing, Inc

The Accent of Jeolla-do Type of Korea

LEE Munsuk

This paper presents a new interpretation of the Jeolla-do dialect. The accent of Jeolla-do type has four distinct features. Firstly, the initial segmental features are strongly relevant in the distribution of accent classes. Secondly, the initial syllable with long vowel is the first condition when the accent class is decided. Then, only the first two syllables are significant in the accent. Lastly, from the third syllable, the accent is random. In particular, this interpretation shows that only the first and second syllables have a definite pitch. Any pitch has determined since the third syllables make it unnecessary to use the concept of the outright type as well as the connection type which is used in the analysis.

In addition, the accent system of the Seoul dialect whose hypostasis has yet to be understood can be interpreted if we think in terms of the accent of Jeolla-do type.